れていたものと思われる。近世下層面の時期は、陶磁器の年代観や、「慶長十四年」銘の陰刻のある鬼瓦が出土していることから、一六世紀末～一七世紀と考えている。

8　木簡の釈文・内容

(1)
・「修福院右志者為正泉禅定門忌也今月今日敬白　」
・「□（ま カ）　中十六」　260×30×10　081

明確な日付けが書かれていないものの、内容は板碑などに刻まれている銘文と類似しており、追善供養をしたことを示している。ただ供養の具体的な内容が五輪塔の造立なのか、何らかの法要を営んだことなのかは明確ではない。

以上が調査時での知見で、今後出土遺物を整理していく過程で、道勝寺との具体的な関係なども検討していきたい。

（草原孝典）

長登銅山跡（山口県美祢郡美東町）
出土の逃亡関係木簡

長登銅山跡は本誌第一三号で報告したように、奈良時代以来の銅製錬跡で、銅山経営に関わる木簡も多数出土している。左に紹介するのは、一九九〇年度調査で発見されたものであるが、木簡研究一三号には未報告である。釈文は次のとおり。

・「逃（十二十二）十（十二）四四六六十（十二）（四十八）人　一一一一一一一　冊
・「大友三百五十五斤　(228)×52×4　019

表の「逃」は逃亡者の意で、以下、人数が記される。銅山の下級官人が、一定期間の逃亡者を文書に清書する前のメモではないかといわれ、当時の計算方法が知られる点でも貴重である。つまり「十二」と「四十八」だけが丸で囲まれ、その他の数字の右わきには「一」「二」の符号が残っているので、計算方法は、四回出てくる「十二」をまずかけ算で四倍して「四十八」を算出し、残りは数字を足し算で「冊」を出したと考えられ、計八十八人の逃亡者がいたと見ることができるという。

長登銅山跡出土の木簡は、生産機構の解明が可能な点で、今後の研究の進展が大いに期待されるところである。